

研究会報告

第 66 回 東京医科大学循環器研究会

日 時 : 平成 29 年 5 月 20 日 (土)

午後 2 : 00 ~

場 所 : 東京医科大学病院 第一研究教育棟  
3 階

当番世話人 : 戸田中央総合病院 内山 隆史

1. リスク軽減目的の BPA 先行ハイブリッド治療の CTEPH の一例

(東京医科大学 心臓血管外科)

鈴木 隼、小泉 信達、加納 正樹  
藤吉 俊毅、丸野 恵大、高橋 聡  
河合 幸史、松原 忍、神谷健太郎  
岩橋 徹、西部 俊哉、荻野 均

【症例】 49 歳、男性。17 歳時に肺化膿症のため左下葉切除の既往歴あり。2013 年より労作時の呼吸苦と下腿浮腫を自覚し、近医での心エコー検査で肺高血圧 (PH) を、CT で肺動脈血栓を認め CTEPH と診断された。薬物治療を施行するも PH が残存するため肺動脈内膜摘除術 (PEA) 目的にて当院紹介となった。NYHA III/IV。右心カテーテル検査で平均肺動脈圧 (mPAP) 72 mmHg、心拍出量 (CO) 2.79 l/min、肺血管抵抗 (PVR)  $1,663 \text{ dyne} \cdot \text{sec} \cdot \text{cm}^{-5}$  と重症 PH を認めた。また、CT 検査により肺動脈血栓にも石灰化を認め、長期間の CTEPH 罹患歴を有すると考えられ、リスク軽減目的にバルーン肺動脈拡張術 (BPA) を先行させた。2 回の BPA (右 A4a A4b A5、左 A4 A5) により、mPAP 47 mmHg、CO 4.01 l/min、PVR  $800 \text{ dyne} \cdot \text{sec} \cdot \text{cm}^{-5}$  まで PH を軽減させることができ、その後の PEA も順調に施行でき、術後経過も良好で無事退院となった。

【結語】 リスク軽減目的に BPA を先行することで、重症 CTEPH 症例の PEA を合併症なく無事施行することができた。文献的考察を含め報告する。

2. 生体肝移植後に心房頻拍を来した一例

(東京医科大学八王子医療センター 循環器内科)

石井 絢子、富士田康宏、佐々木雄一  
外間 洋平、齋藤友紀雄、高橋 聡介  
相賀 護、渡部 圭介、西原 崇創  
大島 一太、里見 和浩、笠井 督雄  
田中 信大

症例) 50 歳男性。アルコール性肝障害に対し 2016 年 5 月 20 日生体肝移植施行。術後 2 ヶ月より、息切れと心電図上 II、III、aVF で陰性 P 波を伴う心拍数 100 回/分程度の narrow QRS tachycardia を認め薬物療法を開始した。その後症状改善せずアブレーション治療の方針となった。三次元マッピングにより頻拍中の voltage map と activation map を作成したところ、右房中隔の下大静脈側は広範な低電位および瘢痕領域を認め、さらに冠状静脈洞前方に低電位領域と線状に double potential を認めた。最早期興奮部位は、三尖弁輪 3 時方向と低電位領域の中間部で focal pattern を示す心房頻拍であった。同部位で通電を行うと、開始 3 秒で停止、以後再発はない。本例は一般的な心房頻拍の好発部位と異なり移植手術との関連が疑われた。肝移植後の心房頻拍の報告は少なく、考察を交え報告する。

3. 残存腎の中等度腎動脈狭窄に対して FFR を施行した一例

(東京医科大学茨城医療センター 循環器内科)

東 寛之、東谷 迪昭、落合 徹也  
大嶋桜太郎、鈴木 利章、小松 靖  
木村 一貴、阿部 憲弘、柴 千恵

症例は 68 歳男性。単純 CT で左腎萎縮と右腎の軽度腫大を指摘され精査を開始。高度肥満から腎動脈エコーでは判定不能であった。レノグラムで左腎機能は廃絶、右腎は全体に血流低下を認めたが明らかな狭窄パターンではなかった。MRA では右腎動脈起始部に狭小化と左腎動脈に有意狭窄を認めた。以上より左腎動脈狭窄による左腎機能廃絶と高度萎縮、代償性肥大を伴った残存右腎の腎動脈中等度狭窄と診断。降圧剤内服によって血圧コントロールがついていたため、ステント留置術等の積極的治療の適応はないと判断。しかし、クレアチニンが約 9 ヶ月間の経過で悪化。残存腎である右腎動脈狭窄の治療適応の評価目的に腎動脈造影検査を施行。血管造影では、右腎動脈起始部に 50% 狭窄を認めた。塩酸パパベリン 30 mg で負荷を行った FFR は 0.95 であり有意狭窄ではないと判断し、腎動脈ステント留置術は行わずに手技終了。今回我々は、進行すると維持透析療法に移行するリスクが高い残存腎の腎動脈狭窄に対して、様々なモダリティーを用いて評価を行い、内服治療を選択した症例を経験した。貴重な症例と思われ、考察を加